

バスケットボール指導者  
ほしざわ じゅんいち  
**星澤 純一**さん  
インタビュアー えのきどいちろう



あなたが子どもの頃に抱いた夢は？ アスリートや一流の指導者が夢を持つことの大切さを語る「夢を信じて」。インタビュアーはコラムニストのえのきどいちろうさん。今回のインタビューゲストは、バスケットボール指導者の星澤純一さんです。

**「考えることを楽しみなさい」と子どもたちには常に言っています**

**星澤** ラグビーの平尾さんが7連覇したときに言っていた「創造的破壊」。だから7連覇できたって。これはカッコいい言葉だなんて、僕も使っているんです。

——問題を見つけて、それを解決していくために工夫する。

**星澤** 主アイデアを考えることが楽しいんですけどね。インサイドスクリーンとアウトサイドスクリーンっていうのがあるんですが、その二つを足してみたり（笑）。たとえば携帯電話にも誰かカメラつけてみようと思った人がいて進化したんだろ。うし。応用できないかなとか面白いかなとか「考えることを楽しみなさい」と子どもたちには常に言っています。

——試合の時にタイムアウトを取らないこともそうですが、選手たちに自分で答えを出す習慣、自分なりに考える習慣をつけるっていうのはすごいですよ。考える力がつく。生徒たち

に押し付けることが全然ないんですね。

**星澤** スローインひとつとっても、変えるんだから変えていって伝えているんです。自分で考えて行けて。今、「ザ・コーチ」って本を読み直しているんですけど、ヘッドコーチなんていうのはバスケット知らなくていい、優秀なコーチ…ディフェンスコーチとかオフフェンスコーチを集めて束ねてまとめて、あとは選手にやる気を出させればヘッドコーチはできるんだって書いてありますね。

**自主的にトレーニングをするように仕向けてやった時の方が結果的には成績がいいんです**

**星澤** 実際、自主的にトレーニングをするように仕向けてやった時の方が結果的には成績がいいんですよ。それとね、土日に親がみんな見に来てその中で練習をやる。いっぱい練習見学に来て人が見れば、人の目があれば頑張れるじゃないですか。そうしたら今度は県内を中心にいろんな部活の先生方がどういうふうには指導してるの、

て聞かに来たり。先生だけじゃなくて、実際に子どもたちも連れて来る。多くの目が注がれますからますます盛り上がった中で練習するんです。「ああこうやって練習やるんだ」とか「止まってる人いなね。並んでる時もなんか動いてる」って、それぞれの競技に応用できるっていうんですね。

——それは部活の新しい道を作っていくことにもなりますね。

**星澤** 京都大学のアメリカンフットボール部は4年生が全部雑用やるんだそうです。みんなほとんど大学からアメフトを始めるので、圧倒的に多いフォーメーションの数を覚えるのが大変なんです。だから4年生が雑用。これを聞いて、じゃあうちもそれがいいって、やり始めました。当時の3年生に「これで京都大学は日本になってんだから、お前たちが3年生になって、もう一回ボール磨きとか掃除やってくれたら、チームは強くなるから我慢してね」って言って。卒業生たちはそれを大学に行ってもやろうとしているようです。

——帝京大学のラグビー部も最上級生が雑用をやるって聞きますね

**星澤** 教員たちは卒業してどんな大学に行っても「インカレで優勝しよう」って言うらしいんですよ。朝行つて個人練習やるとか、夜ちよつと残つてウエイトトレーニングやるとか、自分が上手くなりたいから自分で考えてどんどんやる。そういうモデルになってくれるから大学の監督からも評判がいいですね。

——たとえ弱いバスケット部でも、それは種を次の代に渡すことになるかもしれないから、元気いづばいわけですね。

**星澤** そういう先輩がいるってことは必ず現役の子たちにも言うんです。そうするとその現役の子たちがまた大学に行ったり、社会人になったりして、頑張る。僕はここが日本の学校スポーツのいいところのひとつだと思っんです。

## PROFILE プロフィール

### 星澤 純一(ほしざわ じゅんいち)さん

1976年、創立初年度の神奈川県立富岡高等学校(現・金沢総合高等学校)でバスケットボール部を創部し、顧問に就任。県立高校ながら同校女子バスケットボール部を全国屈指の強豪校へと育てあげる。1988年のインターハイで初優勝し、富岡高校の名前を全国区にした。インターハイ優勝3回、ウインターカップ優勝1回、2012年の全日本選手権では高校として49年ぶりのベスト8の快挙を成し遂げる。2013年3月に定年退職し、その後WJBL羽田ヴィッキーズヘッドコーチに。現在は、講演活動などを通じて、バスケットボールの普及啓発に努める。

## 取材を終えて

星澤さんのお話にはグイグイ引き込まれました。非常に具体的で、かつ説得力がある。それから不思議なユーモアをたたえてるんです。話の中身がシリアスであっても、どこか常に飄然としたニュアンスがある。真に迫りすぎない、とても言えばいいんでしょうか。言葉に遊びがある。明るさがある。「鬼コーチ」じゃないんですね。目標が高く、要求がきびしいとしても、たぶんバスケット部員たちは笑顔でついてきたんじゃないでしょうか。

